



百物評刺ま之二月録



才一 狐の沙汰付 百丈禅師の事

才二 狸の事 付明の鄒智并 母友助康子柄の事

才三 馬山地獄并 座頭管の事

才四 菅根の地獄并 富士の山と号する事

才五 産婦并 幽霊の事

才六 垢祿ふりれ事

才七 高隠化抱付 唐の李赤の事

百物評刺ま之二月録

目録

長久保



百拍伝抄卷之二  
目録

百拍伝抄卷之二

才一 狐の作法 付 百丈禪師の事

入此云々狐をきまのて紙釣やくはゆくればし  
 ぎし高藤を海にたてたゆめを理や侍ん志の  
 書の手紙ふらとささりなりりやと問うるハ  
 先望云々狐ハ妖獣の長やく三瀬とさるなりこれ  
 大拍と録小性海をたれ已り類としらぬるはあ  
 減る方めと厚さ氷のらりぬる紙尾紙吹く  
 皮も叩くは皮ひとまり唐云々ハ百葉の狐  
 とれりく美女となり子集はしてき尾まれく流る

百拍伝抄卷之二

なれりともや宋の王欽若と云者まじはれつと後  
をく何者かゆが死と云く九尾狐と名付る宋史  
に見たりかくあるうへ志の毒もまじはれ侍人  
長生殿と云く智ある地なり昔有る狐の類虎と  
て名にせんまじふ中此老狐分はせと虎にり  
りて云汝等汝がとらるるなれ家ありく此歎  
の長あまの何事と云く汝等なかりありうが  
ひ狐は汝等汝がよはせえんよまじはる虎けあ  
と思ひ狐のわらりゆしふと落く此歎なま  
らりそれらと虎まじふと云くうなまはるは  
狐

おろくわらるるを跡よりとまら虎とらるるなりして  
虎汝河さびき心にしを狐の虎の威とらるるや云く  
智ある歎なれは汝等と云くまじはる虎とらるる狐  
荷た多右汝打じて神是此神とせりと云く是  
世ふ云はるいななり狐ありそや神と云く此文右社  
塔につと臨くぬく神此汝らめなりと云く王あは人  
此いふ狐と云くをふははるる人此おまひな  
あよよりて女もかへ老僧と云くなりあはぬ拙と云  
けりともはる是神と云くけんあはるるなりと云  
なうは狐は狐に變化と云く神ありと云く文はまひな

世は人の心なるはもつる人の心なるはとて  
 かくるもはるし百子人此目は女と女の心なるは  
 子人もにわはしく女と思ひなりぬるはとて  
 びり百丈禪師の説法をききし時目毎一人此信  
 具するはあつた時禪流の流にたりて禪師はびり  
 けくつやうとて人問あつたは山は住ひ老流なり  
 そととてきとれしは生の時けふに信し法を  
 説く人其つて同じく智識を周果はあつた  
 世とて説きて曰博学多才此智識も不惑周果  
 こゝえりりも答はあつたはしよつては百生なる



野航舟に墮し今よ山に墮るまよひの  
 何ぞん事まよひに志まよひの事まよひと云々まよひバまよひ  
 歩まよひくもまよひ紀事まよひなりまよひをまよひ方まよひ我まよひよまよひむまよひくまよひ同まよひ角まよひと  
 わまよひきまよひハまよひ僧まよひ回まよひくまよひくまよひ智まよひ識まよひをまよひ因まよひ果まよひよまよひあまよひるまよひやまよひとまよひ禪まよひ師まよひ  
 こまよひろまよひくまよひ此まよひままよひりまよひくまよひ智まよひ識まよひありまよひとまよひ何まよひえまよひ因まよひ果まよひよまよひあまよひらまよひ  
 うまよひんまよひたまよひぐまよひ不まよひ昧まよひ因まよひ果まよひとまよひ云まよひへまよひかまよひんまよひ僧まよひ云まよひ下まよひに  
 ありまよひてまよひままよひままよひりまよひしまよひけまよひなまよひくまよひとまよひ禪まよひ師まよひのまよひ一まよひ云まよひよまよひみまよひてまよひ畜  
 生まよひはまよひれまよひくまよひくまよひみまよひをまよひ海まよひぬまよひくまよひままよひりまよひとまよひままよひりまよひとまよひやまよひ是まよひ禪まよひ学  
 此まよひ物まよひをまよひ話まよひ則まよひ行まよひてまよひ結まよひとまよひ百まよひ史まよひ禪まよひ師まよひのまよひ航まよひとまよひ僧まよひと  
 見まよひ終まよひハまよひかまよひどまよひ思まよひひまよひ如まよひ一まよひ此まよひ迷まよひひまよひ信まよひ之まよひ是まよひをまよひ變まよひ

化まよひ此まよひ術まよひありまよひわまよひらまよひくまよひ留まよひ哲まよひ人まよひをまよひ航まよひよまよひハまよひままよひれまよひどまよひ也まよひ  
 夫まよひはまよひ哲まよひ人まよひのまよひあまよひらまよひ航まよひとまよひなまよひげまよひずまよひといまよひふまよひままよひりまよひはまよひ是  
 志まよひ人まよひをまよひ火まよひよまよひ入まよひくまよひとまよひなまよひるまよひだまよひといまよひふまよひはまよひ真まよひ人まよひ此まよひあまよひま  
 火まよひとまよひもまよひんまよひだまよひとまよひ云まよひふまよひ航まよひなるまよひらまよひはまよひ是まよひとまよひ哲まよひ人まよひのまよひ性まよひやまよひを  
 ぬまよひきまよひ真まよひ人まよひ此まよひ徳まよひをまよひくまよひ航まよひのまよひ術まよひはまよひうまよひままよひれまよひぬまよひハまよひ哲まよひ人  
 此まよひ徳まよひなりまよひかまよひらまよひ智まよひわまよひらまよひるまよひままよひりまよひのまよひ事まよひとまよひままよひれまよひよまよひかまよひらまよひるまよひとまよひ  
 男まよひとまよひりまよひしまよひかまよひらまよひ何まよひらまよひがまよひやまよひ餌まよひはまよひほまよひらまよひくまよひとまよひ何まよひ徳まよひわまよひき  
 ばまよひなりまよひ此まよひ航まよひよまよひ古まよひ今まよひにまよひ通まよひるまよひ情まよひ去まよひとまよひ佛まよひ船まよひにまよひはまよひらまよひくまよひとまよひ  
 ほうまよひ海まよひくまよひとまよひびまよひらまよひりまよひてまよひ身まよひ法まよひほうまよひらまよひほまよひらまよひ名まよひとまよひらまよひくまよひとまよひ世  
 航まよひ海まよひ況まよひやまよひ航まよひよまよひおまよひわまよひくまよひとまよひやまよひ又まよひ世まよひにまよひ航まよひつまよひきまよひとまよひらまよひくまよひとまよひ小まよひ舟

わりのけくきさのきつうのくさきとけりて  
えんが初りぬし内虚の時外邪のひまき  
ふたの理なき人々悲感哀樂七情をい  
しと色く公れ主人外にはるり又のき  
分はるもふれ者よのき像さうかひ  
ちなる海しを中かたし起人を子  
狐とをぬくはさうく又狐と當は  
身ともておと照くた物なきと當は  
狐の火の神なりげれは當きかた  
すのあはる狐は火れさうしは  
にまるとみくらり世俗の半るれ  
はあく火とさうとさうもも  
どうちて火とさうとれ  
海傳りされはあや陰陽師の福の種  
うさい尾とれは必き宝珠と半  
あくや傳らんはさうれ

にまるとみくらり世俗の半るれ  
はあく火とさうとさうもも  
どうちて火とさうとれ  
海傳りされはあや陰陽師の福の種  
うさい尾とれは必き宝珠と半  
あくや傳らんはさうれ

身二

狸の付明部智并母友物康手物の  
先生れいさく狸の狐のごまに  
あはれものえんらる事ハわさく  
まご却てぬしきさうまごた  
る

多く人とあざむけばも切強きものくく人を侮よ  
 いたららん母よいらゆるな多物とらふおあなけ  
 物の志まじいほしきくげ方れ一かさくたじき  
 むつごといふあなるるむ或い武勇れさあひ  
 にも武勇ゆかうこうだ博學れ學者を博學  
 修之内わさうり戒律のお家々を戒律よ  
 はく邪魅さうだそらおながの福とみ  
 肉ふゆよりあまは妖怪の物と害とならゆ  
 ざあかりしそまあ一かざくとはくもくう  
 こ少部もつあともくくくまごひん物

かり侍らん近比大徳の代は鄒智と博識の人を  
 しが物受るゆてま物とらんわほしよま  
 現より大さなうもと出く鄒智の教となん  
 治鄒智わゆる思ひながうてあて狐狸のま  
 かりしと推しめ朱筆れわりあくも中  
 ふむとあまをまけてあひまのくは  
 ろむ娘のまじいけりしが物れあひおひて彼  
 大さなるもまかりあなまけむくまけしむの  
 字をたぬくといふ鄒智をわつりるだ彼物ふ  
 屋うまはけさふ信りゆり程あまらあま



はく学者紙おきしに君ら記ふ何公なく文字  
をうまはるはゆふゆふと進むる御術をうま  
たじき公のくむるのふ文をよとわたりたし  
は文字をうまふとす内いぬるのうれんはさ  
夜札的うり人なるまわひて家と給ん事のみ  
色とど法慈悲おねしてぬり進むとほしりバ  
きとくまをなむくふとあひて硯の氷おくわ  
あふはうまふひあふり仲あくとえんう  
皇的通紀ふのまより又じし結友た陽の助康丹  
波をへりし不目考て人などをうりたれん右

堂のまをらふくわさんとほまわらり此若しや  
は堂ふいじしよる人ら抱のゆへ法を用らひの  
成助康何程のりうらんそとありたり  
和書あり風明て度しおぬらぐ物ささい  
ハ正面の柱ふるまひくわらりに  
のまのひてらあはみかれたま  
まのうれんお何ふあは堂に朝ふむ  
来て徳屋がさうり大なるも紙のまそ  
ゆんとら助康とわらり見ゆなれは  
むとららちりゆり引ぬん  
助康大カ



かねんあゝ志じかろひける怪あいの隣子  
 引えならりそ隣子と申に魚ぞくうへは  
 心好とむうみはほと隣子れ下にぬく  
 ひばおらはいしと海へ細くぬれいごあひ  
 のろそおほしおまことなごたりそ時下人よ  
 びて火張うるあくる道にぬる裡あくるりしとあ  
 物たりそほはつら堂よ人とりそ海のしとま  
 なるそ9番園集よんしり  
 才三 五名山地く岩ごたうるの事  
 又同くいそ有るそ母地獄をいふあわり鼓の海



一々人の心みだりては者なるの物なりあはゆ  
 こやぶ事わりのまうへとれらみだりては人の身  
 なまればあまなりあかどと出まれば何責あはひ  
 びかりて戸を踏破入るがゆと思ひ出さるる  
 客もししとてつり又富士ののぼりて人  
 物目にいふ金とてさる事平の客あつたれ強  
 徳人の戸侍の何れに理がや先生の言とて是後  
 人此氣のおよぶる幻客なりてしつりも福侍  
 かく戸をそ我をかく佛に強り強よあはる者  
 此存のごとく仏英とてやまひ侍もたは福元

のなきおに佛身強らつにわらぶたは是自性  
 正覚強なるは仏心とて侍る事仏道第一乃  
 眼目やも此座ゆされば佛に中にはわら乃侍  
 こまなる人のまのひく責傷ふあがらるる強  
 まへ侍るのこそれ地獄の事鬼なるお侍るこ  
 わらりて戸侍もこと又かたり戸せん彼佛家と死  
 なまのいし地とては油法は是愚人の好悪とて  
 て何れとて点の刑符強まらばんこく死ゆるな  
 こ者のあふ志がくゆけく教とて侍るのい  
 うそり人死かたりはわらるは又ふるみまら

くるり河らんやあつゝの我物ふいふ所の後極心お  
 び越中れあつゝ心まて心皆確然れせいりの心  
 くわさぬら紙戸なつりしあつゝゆるぎとわじ  
 せかく名付あつゝあわりの一統志満度徳志なれん  
 ころとわゆるまふあつゝあつゝ人のみあつゝあつゝあ  
 或んえらつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ  
 ながつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ  
 いさつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ  
 免いさつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ  
 あり直れいし事紙後になつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ



百の九平川...

氣の中にまゝあるは後目には思ひごとくにみ  
 ぶとわくPなりとすまゝこは多かたのほほしつ福つ  
 幸かどのさうんあゝとさうりて爰れ後つり也  
 らやうさななくお果は小兒とんまじつるじつに  
 爰なり是たぐ積毒れわらうあゝとさうに訶責  
 の後わわらぶさう人司馬温公の教めと人乃獲生  
 らくは地ぐぐり始魔王爰にわひしかなどいふも  
 仏法もろてほよ皆人がくPせり是まゝひれなり  
 じつ実れわらうりぞなうべいんが佛法もろつらる  
 られいゝありと獲生の者侍まゝ一人とかなれ

事ゆゑさふなとP終るり子哉不易れ編なれをこ  
 ら文公小学むとのせぬひたり或は志しと親なれる  
 妻なごの死く抱毎のほしとわらう出家なるのけり  
 てそこく誠海りしにそ死ふりかゝんとおつり終し  
 なるひく死人小恙と知りしは恙抱れ袖にまな誠  
 持するのほしとさるもそさるのれ終るにそと侍り  
 何事しとこの学者たらなれはたこの推察のふ  
 極さる富たこの事事の事への物月れ光わく雲  
 れ爰わひとつららに似るを月れ光りたまふとゆき  
 目ふとやぐ早ふたりし程子石仏の光はとあめふ

百廿四 伊弉諾伊弉册  
子思ひわつせ給ふ道とてそまの山川をまゝ  
神とてゆつるべし我れとつ川の河をなすん名  
わね大山大川こそくを佛若れぬ領ぢに事  
こそゆき

才女 うぬめののり付幽霊此事

又同じく世より傳つるぬめを尸抱え給  
ふ子も抱えりふさるのうぬめを海より  
女も抱え給ふの事ありては下る血  
あそみくもあそみくもなくと尸なるとり  
人死くは他の抱え給ふ事ありては地獄の

中と懸く一もあそみぬめにやんそま(一)は生  
れりてく進のり付り傳ふ事ありては尸ハ  
とりにしめと姑獲多又も抱え給ふ女がとり  
中記あるいそ鬼神の類なりも紙巻くも  
なり毛紙ぬぎて女と抱えりては産母の死  
後なる事なりけれぬ乳わりて人乃  
子とりて已う子となりて凡お児の衣類など  
おふくくはるるいそも来て血紙付ては  
ぬきへも兎野宿をなりの刺刃おぬき  
又お草の尻あそみは雄は七八月には





世の中此事に於て變と成るは度々人死くた悔し  
われららるるはつとつある事なり万右に於ては  
氣の始つとく彭生とてくからき變なり万右に  
一なり變と成るに於てはつとつとてく死すは  
とつとつ人の氣はつとつとてく死すはつとつと  
の右のつとつとてく死すはつとつとてく死す  
なつとつとてく死すはつとつとてく死すは  
のうへつとつとてく死すはつとつとてく死す  
小徳ふとつとてく死すはつとつとてく死す  
てつとつとてく死すはつとつとてく死す

うめしされはつとつとてく死すはつとつとてく死す  
氣のつとつとてく死すはつとつとてく死す  
事といふんがやとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す  
つとつとてく死すはつとつとてく死す



とれけしきさきいそ程あるに及くそとさなるり  
 氣のあまらふ所を消すなり又哲人名傳を  
 どの変化あるそ消すなりはそ消すなり妖を極小  
 したるる理なれはそ変化ありそそ氣息に  
 あまればはらばしうれの中者平お軍由さかく  
 伝送後依者たふ付きそそつひはわきごとみ  
 かけしきさきいそ程あるに及くそとさなるり  
 眼張むさきさきいそ程あるに及くそとさなるり  
 僅身此人おとさ米かさるりぞさきさきいそ程あるに  
 かり事はくさきさきいそ程あるに及くそとさなるり

その後 眼紙をうらみれば げめく 體態となりける  
かならず 他人のうらむと けつらりあや 畢竟 正賞 神位の  
靈れとよのうらむ 得利金の 印といふ是より 幽霊  
なり 神位 世の事 此人を生かす 申したる けつらりあや  
事なれ ありきと づかぬ 事のこと けつらりあや けつらりあや  
はめくさる 申す けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや

才六 垢粉がりの事

一人これ 垢粉がりのこと 垢粉 垢粉がりのこと 垢粉 垢粉がりのこと  
とむく けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや

あはれとく けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや  
けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや けつらりあや

才七 雪陰のけつらりあや 垢粉がりの事 雪陰のけつらりあや

なる老海方さふら海なる付る病の不瘧疫乃様  
 あり目ありげく身ゆるさうやい事いける神  
 にくる来りくゆるとしし先生いゆるくも神  
 ありあけりさるまゝ若狭とさし海がまがれひ  
 たりはし海に付くられとさう船さび又唐を  
 廁の神紙紫姑神といふりともやじり赤陽の  
 李景との小人赤陽の何藤白とさる女紙じりく  
 旦ひものさせくく赤書海く神とて正月十  
 五日小廁の中あり教せよ彼何藤郷ありま  
 とか世しうばさるは西月毎よまの山とく廁の神

といふし事あれはこれく真作たりさといふ  
 だうだ又伝家ある鳥琴沙磨のまといふ紙書院  
 の神なりとさり行けぬまよと火縮ありとあま  
 とさるひ磨垢紙法ありあ切法ましくけると  
 伽藍のうばまがよれあるあよけぬま紙とさ  
 つま小書花紙うなをさそは法師さる老廁か  
 け付まれとけ咒紙唱くるとあくと存紙ぬ  
 さる法なりともやされたる今世の人とあく  
 わるるげものさるあ海に氣れつるなる水の  
 きのらびじり柳子守り半と李赤り徳あり夜



引くはちのしむ物として相づらうは是れ  
 にわらへてそま交むれゆりともひくく  
 るんとそ人ぬぬもさうゆりゆりゆり  
 二三十里打らるるの宿もゆりゆりゆり  
 爰ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 物も圃の中もゆりゆりゆりゆりゆり  
 是とゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 身はゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 是とゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 百物源利巻之二終

